【講演要旨】

日本におけるサモア人妻たちの子育て

倉光　ミナ子

Ⅰ　はじめに

1997年の春に地理学科を卒業し，そのままお茶の水女子大学の大学院へ進学した．それからかねてより希望していた国際協力について学ぶために，イギリスの大学院へ留学した．約１年間の留学を終えて帰国してから，国際協力について修士論文を書くために海外でフィールドワークしなければならなくなった．すると，当時の指導教官の親しい友人が南太平洋に位置するサモア独立国（以下，サモアと略す）でJICAの国際協力専門員として働いていた縁から，そこへ行くことを半ば強引に薦められた．当初はかなりしぶしぶ出かけたが，不思議なもので，それから10年以上，サモアに通い続けている．さらに，サモア人のパートナーを得て，２人の子どもたちにも恵まれ，現在に至っている．その一方で，皮肉なことに，子育てのため，簡単にサモアへ行くことができなくなった．それでも研究は続けなければならないために，日本で暮らしているサモア人に焦点をあてて，新しい研究に着手することにした．本日は，その一部である，日本で暮らすサモア人妻たちの子育てについて紹介したい．

Ⅱ　サモアという社会の特徴

サモア人妻たちの故郷であるサモアは面積2,830km^{2}と，東京都の1.3倍ぐらいの小さな島嶼国家である．2016年のサモアの国勢調査によれば，人口は192,126人，そしてその90％はポリネシア系のサモア人である．サモアはサモア諸島の西側に位置し，ドイツとニュージーランドによる支配をへて，1962年に南太平洋地域では一番早く独立を達成した．ちなみに，サモア諸島の東側は「アメリカ領サモア」と呼ばれ，今でもアメリカ合衆国の一部となっている．著名なアメリカの文化人類学者であるマーガレット・ミードが調査を行なったのはアメリカ領サモアの方である．

現代のサモア社会には大きな特徴が三つある．一つは首長制度に基づいた独自の慣習が強く維持されていることである．首長制度はアイガと呼ばれる，各村に根づいている親族グループを基盤としている．サモアでは，ほかのポリネシア地域の島々とは異なり，アイガの長になるマタイ（首長）は世襲制ではなく，男女含めたアイガの成員の総意によって選出される．マタイとして選ばれた者はアイガ経営の中心を担い，さまざまな物事を差配していくと同時に，対外的にはアイガの代表として村の合議体に出席する．現代でも，サモアの村の自治権は非常に強く，マタイたちの集まりであるこの合議体によって治められているのである．サモア人は父方であれ，母方であれ，どちらかの成員としてアイガに含まれていく．アイガの成員はマタイの指示の下，性別と年齢に応じた役割を果たすことが求められる．サモアの日常実践では，通常，個人の希望よりアイガ全体の繁栄が重視されるのである．

サモア社会の特徴の二つ目と三つ目は歴史の中で付け加えられた要素である．一つは独自のキリスト教文化で，もう一つはトランスナショナルな日常生活である．前者に関していえば，現代サモア人の98％以上がキリスト教徒である．サモア諸島に最初に宣教師がやってきたのは1830年で，それから30年後にはサモア諸島からメラネシアへと宣教師が送られるほどにキリスト教は成長した．今日では，キリスト教はサモア独自の文化として根付いており，サモアの家族は夕方には集まって讃美歌をうたいながらお祈りをする．その時間帯は，村によっては車の通行が止められるほどである．毎週，日曜日になると，子どもたちは日曜学校へ行き，ほとんどのサモア人は必ず日曜礼拝に着飾って出かけて行く．

後者に関していえば，サモアでは国際移動が日常の一部である．海外におけるサモア人人口が多い国が旧宗主国であったニュージーランド，オーストラリア，そしてアメリカ合衆国である．サモア人であれば，ほぼ確実に家族の誰かがこのどこかの国で暮らしている．たとえば，ある田舎の村で調査をしていると，おばあさんが「明日からちょっとオークランド（ニュージーランド北島の中心都市）に行くから，会えない」という．その語り方は私たちが東京にいて，明日ちょっと池袋に行ってくるといったような感じなのである．最初のうちは「オークランドってちょっと行けるようなところなの？」と思ったが，簡単に行くことができるのはあちらで待っている家族がいるからである．そして，サモアへ調査に行くとき

写真１　村の集まりに子ども連れでくる女性たち
（2003年筆者撮影）

はこのオークランドを経由するが，サモアでオークランドへ寄って日本へ帰るというと，「泊まるところはあるか」とか，「休むところはあるか」とか，親切に家族の誰かを紹介してくれるのである．

Ⅲ　私がみたサモア人の子育て

実はサモアでも，ニュージーランドでも，サモア人の子育てに焦点をあてて調べたことはない．また，サモア人の子育てに焦点をあてて書かれた研究もあまり見当たらない．しかし，その状況をよく説明しているものとして，たとえば，次のような記述がある．

> 授乳中である限り，乳幼児は母親と眠り，泣くときはいつでも母親の胸にいる．しかしながら，授乳期がすぎると，その子が３～４歳になるか，あるいは面倒をみる「姉」がより大きな家事を手伝うようになるまで，すぐ上の「姉」が幼児の世話の責任をもつ．サモア生活の基本単位はアイガ，血縁，婚姻，あるいは養子による成員から成る拡大家族なので，しばしば幼児の面倒をみる「姉」や「兄」がたくさんいる．（中略）母親は娘たちの面倒を見，年上の姉たちは年下の妹たちの面倒を見るので，新しく生まれた子は次の子がやってくるまで，世帯のあらゆる個人の支配下におかれる．（Muse 1991：222，筆者訳）

今，思い返してみれば，サモアでは男性でも女性でも子どもの世話をする．仕事柄，女性たちの集まりに顔を出すことが多かったが，村ではたいてい数名の女性たちが自分のかわいがっている幼い子や授乳の必要な子どもたちを連れて会合に出席していた（写真１）．概して，小学校に入る前の子どもたちは非常にかわいがられる．そんなに甘くていいのと驚くほどであるが，その子の時代は数年で終わりを告げる．なぜなら，大家族なので，次の小さい弟妹やいとこが生まれてくるからである．そうすると，今までかわいがられていた子は自分より小さい子の面倒をみることになる．10代にもなると，子どもたちはおむつをかえたり，小さい子のトイレについていったり，遊んだり，日本だったら母親がやっているようなことをこなしていく．また，簡単な家の仕事も子どもたちの仕事となり，家族の洗濯をしたり，タロイモを調理したりする．そして，子どもたちは親を含めた年長者に対して，あまり口答えをしない．

今までみていたサモア人の子育てのあり方において，個人的に一番驚いたのが小さい子どもを簡単に大家族に預けていってしまうことだ．たとえば，私がお世話になり始めたばかりのとき，ファミリーのおばあさんはニュージーランドにいる息子の娘（すなわち孫）をずっと預かっていた．もちろん母親がいないわけではなく，その子の両親ときょうだいはニュージーランドで暮らしていた．２歳ぐらいのその子はおばあさんの行く先々，ときとしては別の島に住んでいたおばあさんの娘のところへ行ったりして，サモアでの日々を１年近く過ごし，両親が迎えにきたのちにニュージーランドへ戻って行ったのである．日本であれば，小学校にもあがらない幼い子を祖父母とはいえ，１年近く預けておくというのはあまり見られないだろうが，サモアでは比較的普通に行なわれているらしい．このように，サモアではまさに大家族のみんな，近所のみんな，村のみんな，よく知らない人たちまで，みんなで子どもの成長を見守っているといえる．

Ⅳ　サモア人妻たちの子育て

サモアで調査をしているときから，日本人男性と結婚して日本で暮らしているサモア女性たちの存在は知っていた．しかし，彼女たちに関心を抱くようになったのは，自らがサモア人男性をパートナーとし，日本で子育てを始めてからである．2016年６月末日現在，日本における在留外国人総数がおよそ230万人，上位３カ国は韓国・朝鮮籍，中国籍，フィリピン籍である．そのうち，オセアニアから来ているのが１万３千人で，その中でサモアは５番目に多い65名（永住者25名，日本人の配偶者等10名を含む）が滞在している[1)]．日本はお世辞にも外国人にとって暮らしやすい国とはいえず，在日サモア人は確固としたエスニックコミュニティをつくれるほど同胞がいない．在日サモア人妻たちは当然のことながら，実家（サモア）は遠く，頻繁に帰ることもできない．今でこそ，インターネットの発達により連絡をとることが簡単になったが，以前はその手段もエアメールか，非常に高額と

なる国際電話に限られていた．その一方で，日本社会で子育てをしてみればわかるが，日本では母親に子育てのかなりの部分が任されている．たとえば，弁当づくり，PTAへの参加,病院へのつきそいなどは母親が主体となってやらざるをえないだろう．そのような状況で，彼女たちはいかに子どもを育ててきたのか．それがこのテーマに関心をいだいた理由であった．

日本での経験を語ってくれた３名のサモア人妻たちは皆，日本で国際結婚の婚姻数が増加してく1980年代の半ばより前に，青年海外協力隊としてサモアに滞在していた日本人男性と出会い，結婚して日本にやってきた．３名とも偶然にも２人ずつの子宝に恵まれ，すでにその子どもたちも成人している．彼女たちの子育て経験の話に入る前に，簡単に移民女性の子育てに関する先行研究に触れておきたい．このテーマについては，海外の移民国家では1990年代ごろから，移民女性たちへの子育て支援の視点から調査されている．一方，日本では近年，多文化共生の視点から，アジアからの結婚移住女性の子育てについていくつか研究がある．これらの研究では，移民女性は「母であること」に対して受け入れ国の人々とは異なる認識を有しているので，自らが育った社会に基づくparentingの実践，規範，そして倫理が存在すると指摘されている．また，結婚移住女性は母国語，食文化，宗教といった自分の文化を子どもに教えようとし，自分の社会・文化的規範に基づいて，しつけようとする傾向があることが指摘されている（たとえば，Bhopal 1998やLiamputtong and Naksook 2003を参照）．

それでは，在日サモア人妻たちはどのような子育てをしたのだろうか．３名のサモア人妻たちに，日本での子育ての経験について話を伺った正直な感想は「すごい！」である．彼女たちは非常にタフで，日本で生活をすることに対する覚悟が半端ではない．彼女たちは総じて自分の子育てが正しいか間違っているかと迷うことはあまりない．夫たちが「日本は…」といっても，「子どものことをわかっているのは私」と言いきり，子育ての主導権を握っていた．また，他の日本人の母親たちが自分たちのことをどう思おうとあまり気にすることなく，子どもたちのために必要なことであればPTA活動でも積極的に関わっていた．そして，子育ても含めたさまざまな点で，夫と衝突することを恐れず，自分の意見を言ってきた．このような彼女たちの姿勢は，今，日本で迷いながら子育てをしている私にとってはとても尊敬できるものであった．

ただし，彼女たちの日本での生活は，夫の家族の多大な協力によって支えられていた側面も強い．３名の女性たちは日本にきて数年は夫の家族の近くに居住し，日本で生活していくために必要なことをいろいろと学んだ．彼女たちのほとんどは今でも夫の家族の近くで暮らしており，特に義理の両親や義理の姉にすごく感謝している．また，義理の家族も，彼女たちがとても慕ってくれるのでサモア人妻たちをかわいいと感じている．大家族で暮らしてきた彼女たちはある意味日本でも大家族の中で暮らしてきたといえる．

私は，10代の子どもたちに対するサモアでの厳しい子育て，たとえば，口答えを許さないといった姿勢などをみてきたので，意外と彼女たちの子育てが子どもの思いを優先していたのに驚いた．彼女たちは日本で育つ子どものことを考え，時として日本にあわせたしつけもしてきたという．あるサモア人妻は「子どもたちは日本人として育つのだから」と言い，双方の社会のコンテクストに気をつけてきたことを話してくれた．言語に関しては，サモア人妻の間でも違いがあり，人によってはサモア語を教えた家もあれば，サモア語より英語を重視した家もあった．そして，私だったら反対しそうなことでも，子どもが「やりたい」といえば，やらせていた．「子どもがいたからがんばれた」とか，「子どもができてから離婚は考えなかった」という話からは，彼女たちが日本で生きてきた中で，子どもの存在が非常に大きな位置をしめていることが窺われた．

サモア人妻たちが共通して，日本で子育てをする際に重視したことは二つあった．一つ目は，個人的にはかなり意外であったが，「キリスト教徒」として子どもたちを育てることであった．サモア文化の基盤が独自の首長制度にあると学んできた私は，サモア人妻たちがサモアの文化として子どもたちに教えるのであれば，おそらくここに関わるものだろうと推測していた．しかし，彼女たちによると，キリスト教徒として育てることはサモアの母親としては一番大切なことであり，食べる前や寝る前にお祈りすることなどを教えてきたという．夫が改宗してくれ，今は家族全員がカソリックとして教会に通っているのがとてもうれしいと話してくれた女性もいた．

二つ目は，「子どもは子ども」として扱うことである．これはある意味当然のように聞こえるが，実はむしろサモア文化をよく表しているのかもしれない．サモアの首長制度では年齢と性別により，その人のいるべき位置とふるまいがきちんと決まっている．たとえば，私がサモアで調査していたときに，友人の年下の姪に軽く見られて困ったことがあったが，そのとき友人ははっきりと私が彼女に「彼女の位置」を教えてやりなさいと忠告してくれた．年下であるその姪は私に敬意を払わなければな

らない立場にあるのだ．子どもについても同じで，たとえば，サモアでは両親が話しているときに，子どもが「お母さん」とかいって話を遮ることは許されないので，そういうことはしないように教える．また，娘たちが成人しても，どこに行くのか，何時に帰るのかということを両親にきちんと言うように注意する．サモアでは結婚しても親元から独立するまでは「子ども」として扱うのだという．

それ以外に，彼女たちの感じるサモアと日本の子育ての違いもサモア社会と日本社会の双方を知っている身にとっては共感できるものであった．たとえば，夫は仕事で忙しすぎて，家族を顧みる時間が少ないとか，子育てを手伝ってくれる手が少ないなどの話題があがった．サモアでは誰の子であっても，その子が悪いことをしていれば，声をかけて注意するが，日本ではそうではないのが残念だという．また，特に印象に残っているのは日本人の母親に「遊びにきてね」といわれたので，素直に遊びに行ったら，露骨に嫌な顔をされたというエピソードだ．日本人の母親は「家が散らかっているから，事前に連絡をしてからきてほしい」と言ったそうだが，当の本人は「遊びにきてねと言ったのは向こうなのに，よくわからなかった」という．そして，「サモアではいつ誰がきても，家が汚れていても気にしないのに」といわれ，日本人の母親の気持ちもわかるし，サモア人の母親の気持ちもわかるしで，複雑な心情になったものである．

V　結びにかえて

６月の講演会では，今後もこのテーマでしばらく研究を続けたいで締めくくった．講演会を頼まれたときに，子育てがテーマなら関心をもって聞いてもらえるだろうという推測から，今，取り組んでいる研究の話をテーマに選んだ．しかし，思い返してみると，実は隠れた意図もあったように思う．私の子どもたちも含め，日本では今，外国にルーツをもつ子どもが増えている．また，東京周辺で暮らす私の子どもの幼稚園には中国人，韓国人，そしてインドネシア人とさまざまな国から来た母親がいる．彼女たちは，日本の幼稚園行事に参加し，日本人の母親ばかりの集まりにも顔を出してくるので，私はえらいなあと感心している．おそらく，これから日本にいてもいろいろなシーンで在日外国人とかかわる機会が増えてくる．その一方で，この原稿を書いているときに，同じような首都圏の幼稚園に子どもが通っている親しい友人から，日本人の母親の集まりで，幼稚園に中国人の子どもには入ってほしくないようなことをいっている人がいたという話を聞いた．そして，そのような母親に限って，子どもの英語教育に熱心だという．日本の「グローバル化」はやはり「欧米化」なんだろうねと一緒に頷いてしまったものである．自分の経験からも，確かに，同じ母親だからといって，簡単に在日外国人の母親と仲良くなれるわけではない．無理に仲良くしろとすすめるわけでもない．しかし，この講演を機に，日本で子育てをして頑張っている在日外国人の方々にも少し思いをはせていただければと願っている．そして，そうした身近なところから多文化共生を考えていかなければならないということを，私はこれから学生たちに伝えていきたいと思う．

注

1）国籍・地域別　在留資格（在留目的）別　在留外国人．http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001161643（最終閲覧日：2017年３月24日）．

文献

Bhopal, K. 1998. South Asian women in East London: Motherhood and social support. *Women's Studies International Forum* 21-5: 485-492.

Muse, Corey J. 1991. Women in western Samoa. In *Women in cross-cultural perspective*, ed. L.L.Adler, 221-440. New York: Praeger Publishers.

Liamputtong, P. and Naksook, C. 2003. Life as mothers in a new land: The experience of motherhood among Thai women in Australia. *Health Care for Women International* 24: 650-668.

くらみつ・みなこ（45回卒）
お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

The Mothering of Samoan Wives in Japan

KURAMITSU Minako（Ochanomizu University）